

日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望

陳 姿菁

要 旨

本稿では日本語のあいづち研究を概観し、今後のあいづち研究の進むべき方向について手がかりを探る。近年、談話分析という手法を取り入れた研究が盛んになると共に、学習者の習得難易度に関する外国語との対照研究を通じて、日本語の特徴の一つとしてあいづちの頻繁さ、その形式の多さが指摘されるようになった。しかしながら、あいづちに関する研究はさほど新しい研究項目ではなく、1950 年代には国語学においてその記述を見ることができる。そこで、本稿ではまず初めに国語学におけるあいづち研究の概略に触れ、その後、談話分析手法による研究について概説する。また特に後者においては、あいづちの定義、頻度、打つタイミング、機能などについて論じる研究を紹介した上で、外国語との対照研究や日本語教育、さらには非言語行動といった視点から、日本語のあいづち研究を概観することとする。また、各領域の先行研究をレビューすることで、残された課題から示唆を得て、質的な研究、各領域を連携させた研究、非言語行動の研究という3つの方向性を提案する。

【キーワード】 あいづち、うなずき、非言語行動、コミュニケーション、日本語教育

1. はじめに

1980 年代から談話分析が言語学の中の一つの分野として脚光を浴びるようになり、その影響で日本国内でも談話分析に関心が寄せられ、盛んに研究されるようになった。また、外国語との対照研究や日本語学習者を対象とした日本語教育の立場からの研究も増えてきた。それらの研究を通して、日本語におけるあいづちの際立った特徴が明らかにされてきた。水谷（1984, 1988）、松田（1988）、渡辺（1994）、窪田（2000）などが指摘しているように、日本語のあいづちは円滑なコミュニケーションを行うために欠かせない要素であり、学習者にとって重要な学習項目であって、その実態解明は重要課題である。

あいづち研究の大多数は言語化されたあいづち、つまり「言語的あいづち」に着目しているものである。しかし、人間のコミュニケーションは対面の場合も多く、そのため、「言語的あいづち」だけではなく、非言語行動の中であいづちとみなされる行動も含めて考えなければならない。つまり、非言語行動の中であいづちとみなされるものは「うなずき」「笑い」「視線」などがあるが、その中で一番明確にあいづちと見なされる「うなずき」を考察に加えることが重要であると思われる。ここでは、便宜上

「言語的あいづち」を「あいづち」とし、そして「あいづち」と「うなずき」を合わせた聞き手の行動を「あいづち行動」と呼ぶ。以下では、国語学と談話手法を取り入れた研究を中心にして話題を進めていく。特に談話手法を取り入れた研究に関しては、外国語との対照研究、日本語教育学、非言語行動など様々な視点から分析された日本語のあいづち行動の研究を中心に概観し、今後のあいづち行動の研究を展望して行きたい。

2. 国語学の立場からのアプローチ

本格的な日本語のあいづち研究は 80 年代から盛んになったが、国語学の領域におけるあいづち表現の中によくみられる「はい」や「ええ」などの研究には、古い歴史がある。「はい」や「ええ」などは応答詞や感動詞もしくは間投詞という品詞に位置付けられ、その意味や機能について多くが語られてきた（池上 1952；日向 1979；重光 1985；奥津 1988, 1989；森山 1989；田窪・金水 1997 など）。しかし、これらの研究の多くはあいづちを中心に分析するのではなく、あいづちを「はい」や「ええ」など応答詞の中の一機能として論じているに過ぎない（池上 1952；日向 1979；奥津 1988, 1989 など）。本格的に話し手と聞き手の関係からあいづちを論究しよう

としているものには、宮地（1959）が挙げられる。宮地は話し手と聞き手のコミュニケーション関係において、話し手の「やり」ではなく、聞き手の「とり」に重点を置き、その様相の分析を試みた。宮地は話し手の話に対して、聞き手の「黙・応・転・断」という4つの反応があると述べている。「黙」は黙殺する場合・「応」は前詞¹に応じた表現をする場合・「転」は前詞を機縁として話題を転じる場合・「断」は前詞をそれきりで断止しようとする場合である。さらに、「応」については①「応受」即ち「相づち」、②「応促」即ち「うながし」、③「応答」即ち前詞に対する肯否の表明、④「応述」即ち前詞の態度や内容にのっとって自分の感想（乃至は意見）を述べる場合というふうに分類を行なった。聞き手であることを示すあいづちは「応受」に分類されている。話し手ではなく、聞き手に注目した点や、話し手との緊張関係、そしてそこで生まれる聞き手の対応への分類、さらに、イントネーションへの考慮などの面において、画期的な論文と言える。

3. 談話分析の手法を取り入れた研究

80年代に入り、談話分析という手法が取り入れられると共に、本格的な分析が盛んになってきた。初期には、日本語を中心に分析したものが主だったが、その後、外国語との対照研究や日本語教育の立場からの研究も見られるようになった。

3.1 あいづちの研究

3.1.1 あいづちの定義

あいづち研究をはじめる前に、まず、あいづちとは何かということを考えなければならない。国語学では、明確な定義はなされておらず、単に品詞の中の応答詞や感動詞もしくは間投詞などの一機能として扱われた。その中でもあいづち研究の先駆とも言える宮地（1959：86）は『『聞き手であること』に止まっている。』と述べている。その後、談話分析がブームとなり、談話分析という手法を取り入れることによって、研究者の間ではあいづちの定義が品詞を超えたところで大きな課題の一つになった。これらの先行研究でもあいづちの定義づけが試みられているものの、その説明は様々で、まだ定まっていない。例えば、英語の文献において Yngve（1970）は、あいづち（back channel）のバリエーションが豊富で、“un-hun”とか“O.K.”のほか、短いコメ

ント例えば、“Oh, I can believe it,”や短い質問例えば“You’ve started writing it then - your dissertation?”などをあいづちとして考えている。

日本語においては、小宮（1986：45）は「応答表現の中で、話し手の発話に対し、自由意志に基づいて、肯定・否定の判断を表明することなく、単に『聞いている』『分かった』という意味で用いられるもの」、黒崎（1987：120）は「話者の発話に対して、肯否等の判断を表明することなく、ただ単に『聞いていますよ』『分かりますよ』という信号を送る段階の応答表現を相づちと呼ぶ」、劉（1987：93）は「談話の進行を促すため、相手の話に調子を合わせる聞き手の行動である」と定義している。これまでの研究では、その対象を主に「はい」「ええ」「うん」「そうですね」「なるほど」「本当」等のあいづちに置いてきたが、それをさらに広げて扱う研究もある。水谷（1984）はいわゆるあいづち表現のほかに話し手の話を聞き手が完結する「完結」型の表現と相手の発言の「内容」を自分のことばで再現する「補強」型の表現をあいづちと定義した。また、堀口（1988）は一般的に考えられているあいづち表現のほかに「先取りあいづち」や「繰り返し」、「言いかえ」などもあいづちの機能として位置付けた。「先取りあいづち」とは話し手の発話を聞きながら、先を予測し、それに対して反応した聞き手の反応である。「言いかえ」とは話し手の発話の内容を、聞き手が自分のことばで再現することであり、水谷（1988）では「補強」型と名づけられた表現である。さらに、堀口は一般的に言われているあいづち、例えば感動詞の「はい」、「ええ」、副詞の「なるほど」などは異なる品詞に属しており、これらの品詞を相手の話を繰り返す「繰り返し」や「言いかえ」などの表現と区別するために「相づち詞」と呼ぶことにした。

一方、ターン（turn）という概念を用いながら、定義するものとしてはメイナードが挙げられる。メイナード（1993：58）は「あいづちとは話し手が発話権を行使している間に聞き手を送る短い表現（非言語行動を含む）で、短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものは、あいづちとしない。」とし、ターンをとる直前、瞬時のポーズをとったあとの短いあいづち的表現をあいづちとして扱っていない。他方、Clancy, Thompson, Suzuki & Tao（1996）はターンの最初の部分に現れ

た非語彙的な音声表現を聞き手の反応（reactive tokens）の中の再開的な型（resumptive openers）として扱い、広義のあいづちの一種として考えている。ターンの始まりの部分のあいづちとして扱う研究には、その他藤原（1993）、村田（2000）などがある。

上述のようにあいづちの定義についてばらつきが見られるが、それらの研究に共通している論点がある。それは堀口（1997：77）が指摘しているように「あいづちの定義はまだ明確で一致したものになってはいないものの、話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現という点では一致している」という点であり、その定義を基に多くのあいづち研究がなされている。

従来の研究では堀口（1988）で提案された「相づち詞」といったあいづちを中心に議論してきたが、ターンの直前のあいづち的な表現を論じる論文はまだ多くない。しかし、ターンの始まりのあいづち的な表現は一種のあいづちとも考えられる。畠（1982）は次のように述べている。

「…発話者は、相手が自分の発話をさえぎって、発話をはじめてもよいポイントを自分の発話の中に作りながら、そのポイントで相手が発話を開始すれば、自分の発話を中断し、相手が発話を開始しなければ、自分の発話を続けるというような態度で、会話に参加している。このようなポイントを「発話開始許容点」と呼ぶことができるであろう。あいづちは原則としてこの発話開始許容でうつ。」（畠 1982：66）

畠は上記の理由であいづちには「話しを続けてください」と「私に発話させてください」という機能があると論じている。

実は、このターンの始まりのあいづちは「私に発話させてください」という機能だけではなく、先行する話し手の発話を受け止めながら、これから自分が移行していくターンの内容の知らせのような機能も持つ。話し手はそれによってターンの移行及びその内容の予測が可能になる。このように「受け取る＋予告」という機能を持つ表現は、あいづちの本来の機能からは一步はみだしてしまっているが、その機能の凡そはあいづちと重なっている。このターンの始まりのあいづちはまさに発話と発話の繋がりに関わる存在であり、会話進行において極めて重要

な役割を担っている。そのため、一つや二つの発話を分析することに止まるのではなく、一連の発話の連鎖や会話全体の構造を考察しなければならない。あいづちの新たな側面を見出すためにも、コミュニケーションの構造を明らかにするためにも、今後検討して行くべき課題だと思われる。

3.1.2 あいづちの頻度・打つタイミング・機能

この節では、あいづちの頻度・打つタイミング・機能という順で各研究から得られた結果を見ることとする。

〈あいづちの頻度〉「あいづち」の頻度に関しては、研究者によって、時間あたりの回数や、音節数に対する割合、あいづち間の発話の長さや時間、総発話数に対するあいづちの比率などさまざまな尺度が用いられている。水谷（1984）では、話し手が平均約 24 音声節話すごとに、聞き手があいづちを入れるという結果を得た。小宮（1986）は 2 組のテレビ番組の資料の中から、A 組の対談番組では 9.6 秒に 1 回、B 組の番組に寄せられた電話相談では 6.1 秒に 1 回という結果を出した。黒崎（1987）は総発話文数に占めるあいづち文の割合をあいづちの頻度として求めた。その結果として、少年の平均 12.1%、壮年 19.3%、老年 20.7%という数値を得た。

頻度に関する研究は数多く報告されているが、その大多数は会話全体に対する頻度を測ったものであり、会話者達の話速、話題、人間関係、場面などの諸要因とあいづちの頻度との関係についてはあまり考慮されておらず、単純に比較することには難がある。あいづちの使用状況を浮き彫りにするためには、あいづちの頻度に影響を与える要因とその関係について配慮した研究手法の方が適切ではなかろうか。例えば、いくつかの話題が含まれている会話を分析する場合、その話題ごとに聞き手の関心度や心的態度などは異なると思われる。その聞き手の心的態度の変動があいづち頻度の変化にも影響を及ぼすと考えられる。話題に対する聞き手の心的態度やそれに関連した人間関係などの要因を考慮に入れた質的な分析は今後のあいづち頻度の研究に不可欠であろう。

〈あいづちを打つタイミング〉「あいづち」を打つタイミングに関しては水谷（1984）が音声の弱まりの現れる時、小宮（1986）が終助詞「ね」とポーズの後、黒崎（1987）が方言談話において、音声的な弱まりの現れる箇所、文末詞の「ナー」や「ノ

一」に呼応し、あいづちが打たれるケースが多いと報告している。杉藤（1987）は末尾に声下げのある発話節の後ろ、今石（1992）は接続詞、終助詞の後、またあいづちを求めるイントネーション、即ち（1）短いポーズの後、最後の拍が高い位置から下降する場合と（2）上昇調の場合にあいづちを打つと述べている。メイナード（1993）は文末、ポーズによって区切られる語句即ち PPU（Pause-bounded Phrasal Unit）末付近、終助詞、間投助詞のコンテキストではあいづちがよく観察され、また日本語にあって英語にない助詞はあいづちを送りやすい環境を作り出していると述べている。Clancy et al.（1996）は CTRP（Complex Transition Reactive Token）を用い、あいづちのタイミングを計ったところ、日本語は中・英より出現率が低く、話の途中で打たれることが多いと分かった。

このように、日本語においてあいづちが打たれるタイミングは、終助詞、間投詞、接続詞など文法的側面および、ポーズ、イントネーションなどの音声的側面を含んだ箇所などであるとまとめることができる。また、CTRP のような文法と音声を含んだ箇所では日本語のあいづちの出現が少ないという報告（Clancy et al. 1996）もあるが、外国語との対照研究を行う際の一つの尺度として考えることができる。

〈あいづちの機能〉「あいづち」の機能についての論文としては、堀口（1988）、松田（1988）、ザトラウスキー（1993）、メイナード（1993）、Mukai（1999）などが挙げられる。堀口は「発話のあいづち」の機能を「聞いているという信号」、「理解しているという信号」、「同意の信号」、「否定の信号」、「感情の表出」の5つに分類している。その後、松田は教師の立場からあいづちの重要性を唱え、あいづち機能を上述した堀口の分類にさらに「間をもたせる」という機能を加え、6分類した。Mukaiは話し手の発話を単に受け取った、あるいは理解したこと（simple acknowledgments）と話し手の発話に対する聞き手の態度（attitudes）の2機能を示している。ザトラウスキーは、あいづちの発話機能を「注目表示」として分類している。「注目表示」とは、相手の発話、相手の存在、その場の状況・事物の存在などを認識したことを表明することである。その上で「注目表示」の発話機能を継続、承諾、確認、興味、感情、共感、感想、否定、終了、同意、自己

注目の11項目に細かく分類している²。メイナードは、日本語の会話および米英語会話のあいづちの機能として「続けてというシグナル（continuer）」、「内容理解を示す表現」、「話し手の判断を支持する表現」、「相手の意見、考え方に賛成の意志表示をする表現」、「感情を強く出す表現」、「情報の追加、訂正、要求などをする表現」の6つを挙げている。上記のようにあいづちの機能に関しては研究者によってまちまちである。

話し手の発話が聞き手に伝わり、そして伝わったことを確認できた時点ではじめて会話が成立する。話し手が伝わったことを確認できるよりどころになるものは聞き手の反応であり、あいづちはその聞き手の反応の一つである。つまり、あいづちは話し手の発話が聞き手に届けられたことを話し手に知らせるサインである。実際に聞き手が話し手の話を把握しても、もしくは実際には聞いていなくても、「あいづち」さえ打てば、話し手は聞いているように思い、会話を続けることが出来る。それはあいづちの基本でもある。勿論、このサインには様々な段階がある。聞いていなくても聞いているふりをするものから、話し手の意図したものをまだ掴めておらず話を促したいものや話し手の発話に聞き手が理解し自分の態度を示すものまで幅広く含まれている。しかし、それらはすべて話し手の発話が聞き手に届いたということが前提条件になる。簡潔に言えば、あいづちの基本は「聞いている表示」と言えよう。各研究者達のあいづちの機能に対する分類は、あいづちのこの基本的機能の上に聞き手の態度や感情が加えられたものと言える。勿論、聞き手の態度や感情などは話し手の発話や会話の場面、人間関係、置かれている状況などの違いにより常に変動しており、それも各研究者の分類の仕方がまちまちになっている理由の一つであろう。ただし、分類の仕方が異なっても、その会話を成立させる一番基本となる「聞いている表示」部分は共通していると思われる。

3.2 外国語との対照研究

あいづち研究の中には、外国語との対照研究もいくつか見られるが、研究の焦点の多くは頻度に当てられている。以下ではそれらの研究成果を見ていく。

〈日・中〉劉（1987）は日中の比較対照という視点から、電話会話資料のあいづち頻度を調査した。

結果として、中国人のあいづち頻度は低く、日本人より個人差が大きかった。また日中とも男女差が著しくなく、日中とも文末であいづちを打つことが多く、中国人は約 2/3 の文末で、日本人はほとんどすべての文末ごとにあいづちを打つ傾向があるなどと述べられている。楊（1999）では、中国語母語話者同士による会話では日本語母語話者同士による会話より、あいづちの頻度の個人差が大きく、また中国語の会話では日本語の会話のようにあいづちを打つ適切なタイミングの数が少ないことが分かった。そして日本語のあいづち使用は比較的に均質的なものであることを指摘した。

実際のあいづち行動を分析した研究のほか、アンケートによる意識調査としては楊（2000）がある。楊は中国在住の中国語母語話者及び日本在中の日本語母語話者に対するあいづちに関する意識をアンケートで調査したものである。結果として、中国人が非言語行動のあいづちを好む（例えば微笑みなど）のに対し、日本人はあいづちを好んで使用することが分かった。また「人の話を静かに聞くものだ」という中国人の考えに対し、日本人は積極的に会話に参加するためにあいづちを多用していると指摘した。さらに、場面や相手の要因が中国人に与える影響は、日本人より大きいなど日中両言語のあいづちに対する相違を報告した。

しかし、アンケートデータの結果が果たしてそのまま実際のあいづち行動を反映しているかどうかはまだ議論の余地がある。あいづち行動はそもそも無意識的に行われることが多く、自分が意識的に打つ部分と無意識的に打つ部分との食い違いがアンケート調査だけでは把握し難いと思われる。傾向と意識を調査する為の手段としてアンケート調査は一つの選択肢ではあるが、それを裏付けるためには実際のあいづち行動のデータ分析を伴う必要がある。

〈日・韓〉金（1994）は日韓の電話による医療相談の会話を分析し、頻度では日韓の差はほとんど見られなかったという。また、日本人のあいづちは相手の発話に重なるように打つことが多いのに対し、韓国語のあいづちは相手の発話がポーズに入るとほぼ同時に打たれると指摘した。

〈日・英〉はやくからあいづちの対照研究に取り組んでいるメイナード（1993）は日米の友人同士の会話の録画及び録音資料を用い分析を行った。その結果として、日米会話におけるあいづちの差は著し

いと報告した。メイナードはあいづちの形態を「短い表現」・「頭の動きのみ」・「笑い」の3つに分け、それぞれの頻度及び全体の合計を提示した。その合計により、日本語会話では米英語会話の実に2倍という頻度であいづちを打つという結果を得た。また、日米の頭の動きに関して、両言語ともにあいづちの機能としてよく使われているが、米会話では頭の動きのみがあいづちとして使われる率が日本語より高いということが観察された。また、「短い表現」というあいづちの形態から見れば、日本語の頻度は英語の3倍弱であり、圧倒的に多い数字が観察された。

Miller（1987）は、日本語のあいづちは英語より頻繁であり、また日本語の「ね」は聞き手のあいづちを引き出す重要な役割を果たしているとして述べている。LoCastro（1987）は英語より日本語であいづちが多用され、さらに、日本人とアメリカ人の会話において、アメリカ人の“um”はアメリカ人同士の会話より頻繁に見られると述べている。

White（1989）はアメリカ人同士、日本人同士、そしてアメリカ人と日本人の会話を比較した。結果は日本人同士のあいづち使用はアメリカ人同士より頻繁であることが分かった。さらに、日本人とアメリカ人の英語会話においては、日本人のあいづちの頻度はあまり変わらないが、アメリカ人のあいづちがアメリカ人同士の会話よりずっと増加しているという興味深い結果を得た。Miller は、アメリカ人が第2言語学習者である日本人達をもっと話せるよう励ますために起こした母語話者による応化（accommodation）であると説明している。

〈日・英・中〉Clancy et al.（1996）は日本語・英語・中国語を対象に、聞き手の反応（reactive tokens）をあいづち（backchannels）、反応表現（reactive expressions）、繰り返し（repetitions）、再開的な型（resumptive openers）、協力的な完結（collaborative finishes）³の5つのグループに分け、比較した。結果として、あいづち（backchannels）においては日本語＞中国語・英語という順に、CTRP（Complex Transition Relevance Place）で起きた聞き手の反応（reactive tokens）の出現率については中国語＞英語＞日本語の順になることが確認された。しかし、文法的完結とイントネーション的完結の2つの要素を含んだCTRPを用いて観察した結果は、3言語ともイントネーションの完結より、文の完結の方で起きた反応が多かったため、音声面を排

除し、文の完結だけを計算した。その結果は英語・中国語>日本語という順となった。総括的にみれば、英語・日本語>中国語というふうになり、中国語による聞き手の反応（reactive tokens）の数は一番少なかった。

これらの対照研究を通して、日本語のあいづちは韓国語を除き、英語や中国語と比べて頻繁であることが伺える。

確かに単一言語の研究から対照研究に進めて行くことで、各言語のあいづちの特徴はより浮き彫りにされる。しかし、そこをさらに掘り下げて行けば、単一言語の研究、さらには対照研究においても、対象者の出身地域の考慮があまりなされていないことに気がつく。周知のように英語だけでもアメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語など様々に分かれており、多かれ少なかれ相違が存在している。また、中国語の場合においても、公用語である北京語のほか、方言も数多く存在しており、同じ北京語母語話者でも、地方出身者は方言による影響が大きいと考えられる。例えば、陳（1999）の調査結果によれば、公用語と方言のあいづちの語彙範疇は異なり、その違いによってコードスイッチングが起きていることが分かった。同じ漢語系でも北京語の使用状況と方言の使用状況は必ずしも一致しているわけではなく、今後のあいづち研究では対象者の出身地域や方言による影響などを考慮する必要があると思われる。

3.3 日本語教育の立場からの研究

3.3.1 日本語学習者を対象とした研究

学習者のあいづちについては、対照研究の立場から比較する楊（1997, 2001）と習得の観点から論じる堀口（1990）、山本（1992）、登里（1993）、渡辺（1994）、窪田（2000）、村田（2000）などが挙げられる。

〈対照研究の観点から〉楊（1997）は日本人同士の母語会話（JJ）、中国人同士の母語会話（CC）、中国人と日本人の日本語会話（CJ）の3つのパターンの会話を資料とし、三者のあいづちの形態、頻度、タイミングを比較した。その結果、あいづちの形態は母語の影響を受けていることが認められた。また、あいづちとあいづちの間の平均時間での頻度を出した結果については、JJ>CJ>CC になっており、タイミングの面においては、JJ に比べて CJ は「て形」「格助詞」の後に入れられたあいづちの割

合が低いと論じている。楊（2001）はあいづちの機能を「聞いている表示」「理解・了解の表示」「同意・共感の表明」「感情の表出」の4つに分け、日本人母語話者と中国人学習者の電話会話をもとに、学習者の日本語のあいづちの機能に着目し調査を行った。その結果、日中両言語ともに「聞いている」「理解・了解」「同意・共感」の3つがほぼ同様に使用されているのに対し、中国語学習者の「感情の表出」の表現は日本人より少ないことが分かった。

〈習得の観点から〉習得観点から分析した研究では、様々な結果が見られた。堀口（1990）は7組14人（韓国8名・タイ1名・台湾4名・エジプト1名）の上級日本語学習者同士の会話を分析し、それらを松田（1988）と比較した結果、学習が進めば、あいづちの頻度、種類、適切さのどの点においても日本人に近いものになってきているが、頻度の点においては日本人の5分の1でしかないと述べている。

山本（1992）は中国語、韓国語、英語を母語とする9名の学習者（初級3名・中級4名・上級2名）を調査した結果、若干の例外を除けば、学習段階が上の学習者はあいづちの出現頻度及び種類が増えていると報告している。

登里（1993）は、欧米圏の初級学習者4名（ニュージーランド2名・アメリカ1名・デンマーク1名）を対象に縦断研究を行った。結果として、学習が進むにつれ、あいづちの頻度が上昇し、また「感声的表現」においては個人差が見られるが、「概念的表現」⁴においてバリエーションが増加すると述べている。

渡辺（1994）は中国語・韓国語・英語を母語とする学習者19名（初級6名・中級8名・上級5名）および日本語母語話者3名の電話会話を資料とし、分析を試みた。その結果、学習者の発達段階や母語との間には相関関係がほとんど見られず、発達段階や母語に関係なく、「繰り返し」、「言い換え」、「先取り」のあいづちについて学習者の誤用が共通して現れる傾向が認められた。Mukai（1999）は日本人と英語を母語とする上級学習者2人ずつ5組、日本人同士5組を録音・録画して分析を行った。上級学習者のあいづち使用は日本語母語話者とほぼ同じ頻度で、堀口（1990）と同じ結果となった。一方、あいづちの使用頻度について、日本人との差が見られた。即ち、学習者の話し手の話を単に受け取った

または理解したこと（simple acknowledgments）という機能のあいづちは日本人より高く、話し手の話に対する聞き手の態度（attitudes）という機能のあいづちは日本人より低い数値が得られた。

窪田（2000）は英語を母語とする初級と上級の学習者 10 名（初級・上級各 5 名）を対象に、日本人との会話を 2 回調査し、分析した。その結果、日本語の能力はあいづちの頻度にはあまり関係なく、日本語の能力があがるにつれて、より「相づち詞」を多く使用できるようになる傾向があることが認められた。さらに、同じ学習者の「相づち詞」の待遇性に着目し分析した結果、2 回の調査を通して、初級と上級の学習者のいずれのグループも年配者に対して「丁寧相づち詞」の使用割合が増え、若者に対しては「普通相づち詞」⁵が増加する傾向が見られた。しかし、「相づち詞」の使用には個別にみると個人差があり、一概に学習者の日本語のレベルだけで結論を出すことは難しく、それには、生活環境が大きく左右しているのではないかと指摘している。即ち、日本に滞在したからといって、必ずしもあいづちの習得が進むとは言いきれないと論じている。

村田（2000）は初級後半から上級のイギリス人学習者 10 名に調査を行った。結果として上級学習

者が初級学習者よりあいづちを頻繁に打っていることや上級学習者が態度、感情をより頻繁にあいづちによって表現していることが分かった。

上記の研究を表でまとめると次のように示すことができる。

上記の研究の中で、堀口（1990）の研究結果には疑問の余地がある。堀口は上級者のみ調査を行ったが、その初級との比較は松田（1988）の調査結果によるものであり、同じ条件での研究によるものではない。しかも、堀口の被験者はほとんどアジア系であるのに対し、松田はアメリカで半年学習して日本で 6 週間勉強した学習者を対象としたものである。このように同条件ではなく、かつ被験者背景が異なる場合、厳密に言えば比較するのにも無理があると思われる。しかし、上記の理由により、堀口の研究を除外したとしても、表 1 のように発達段階とあいづちの頻度の増加との相関は各研究によりばらつきが見られた。それには 2 つの理由が考えられる。一つは、各研究の被験者の出身がアジア系、欧米系とまちまちであり、それぞれの母語による影響があるのではないかと思われる点である。もう一つはあいづちの頻度には話速、話題、人間関係など様々な要素が影響しており、それを単純に比較することは難し

表 1 学習者言語の習熟度とあいづち使用との相関

	学習者とその母語	習得と頻度	習得と形式	備考
堀口 (1990)	上 * (韓国・タイ・台湾・エジプト)	相関あり 日本人に近い	増加	
山本 (1992)	初中上 (C・K・E)	相関あり	増加。J>L2	
登里 (1993)	初 (E・D)	相関あり	「感声」：個人差 「概念」：増加	縦断
渡辺 (1994)	初中上 (C・K・E)	相関なし	「繰り返し」、「言い換え」、 「先取り」の誤用の共通	
Mukai (1999)	上 (E)	日本人と類似	SA : L2>J Attitudes : L2<J	
窪田 (2000)	初上 (E)	相関なし	「相づち詞」：増加 待遇性：L2 が J に近づく	
村田 (2000)	初中上 (E)	相関あり	上級：感情と態度をより多用	

注 *：堀口（1990）の研究では学習者の出身国のみで、母語については特に言及されていなかったため、ここでの記述は出身国を表しており、学習者の母語ではない。

C：中国語 K：韓国語 E：英語 D：デンマーク語 J：日本人の日本語

L2：学習者の日本語 「感声」：「感声的表現」 「概念」：「概念的表現」

SA：simple acknowledgments（話し手の話を単に受け取ったまたは理解したことを表すあいづち表現）

attitudes（話し手の話に対する聞き手の態度を表すあいづち表現）

いと思われる点である。一方、習得と形式の関係においては、学習言語が上達するにつれ、増加する傾向があると言えよう。

3.3.2 あいづちの指導法に関する研究

あいづちの指導法に関する研究は大まかに分類すると、理論的見地から論じているものと調査結果から得た示唆という2つの範疇に分けられる。

〈理論的見地から〉岡崎（1987）は欧米系の学生の談話パターンと異なる日本型の談話指導として「聞き手中心の談話の指導」を提言した。さらに、上級後半になって初めて談話指導を行うのではなく、初級から各レベルの発達段階に応じた指導項目を設定する必要性を述べている。水谷（1988）は英語を母語とする中上級の日本語学習者の集中教育を行う機関において、まずテレビ教材で日本人が頻繁にあいづちを打つ場面をみせ、そしてテキストであいづちを打つべき箇所を示し、あいづちの打ち方を指導したと述べている。佐藤（1989）は会話時のあいづちと視線の指導法を30時間のコースに導入したことを報告している。

また、あいづちを含む会話指導の項目について提案した研究は、伊藤（1993）、畠（1988）、谷口（1989）などがある。伊藤（1993）は教室で学生と接する際に心掛けるべき点について、「相づちの指導」を一つの項目として提示した。畠（1988）は日本語会話ストラテジーの項目リストを提案し、その中で「あいづちの技術」という項目を設け、さらにそれを「改まった場面・くだけた場面・機能・ノンバーバル」の4つに下位分類した。谷口（1989）はCummins（1984）の提唱した言語能力を測る基本尺度を基に、会話のシラバスにどんな項目を含むべきかを提言し、「良い聞き手になる」ためのあいづち項目を設けた。

〈調査結果から得た示唆〉上記のような理論的な見地からあいづち指導を提案する研究のほか、調査結果の示唆から具体的に提案するものも登里（1993）、Mukai（1999）、村田（2000）などが挙げられる。

登里は初級段階からあいづちを一定のリズムで打つこと、「相づちをもとめるイントネーション」や文法的に「ね」「よね」などの終助詞の後にあいづちを打つこと、初級段階で「ソウ系」のバリエーションを増やすことなどを提案している。

Mukai は日本語のあいづちと母語のあいづちの性

質上の違いを学習者に意識させることや、もっと多くのあいづちで話し手に自分の態度を示すことを指導するように提案した。

村田は①あいづちとリペア要求を使い分けること、②話し手のポーズにあいづち、あるいは分からない単語のリペア要求をいれるような練習、③切りだし部分の繰り返し練習、④あいづちによる共感表示、感情表出に注意を払わせること、⑤あいづちに短いコメントを加えたり、あいづち的表現からの質問、そして聞き手から話し手へと移行していくなど、相手への配慮を示しながらターンをとる技術を指導する。また中、上級者にあいづちを打ちながら学習者自身の類似体験を付加していくなどの指導が必要であると指摘している。

3.4 その他の研究

上述のほか、方言のあいづちや、あいづちの意味構造、設定された場面におけるあいづちの研究などがある。

黒崎（1987）は兵庫県滝野方言について年齢と男女等の位相から分析を試みている。あいづち表現の異なり数は年齢と共に増加し、頻度は女性および壮年以上の層に高さが見られる。低年齢層は「ウン」、「フーン」など感声的表現を多用し、壮年、老年層は「ソー」形式の表現を多用する傾向があると論じている。

「そうですか」、「そうですね」などあいづちと感動詞の共起を分析し、その重層的な意味構造を明らかにしようとした研究には藤原（1993）がある。藤原は「そう」系のあいづち表現⁶が、話題・情報に対する話し手の積極的な「同意」を表明する場合と、情報の「受容」の表明にとどまる場合との、2つに分かれていると述べている。さらに、「そう」系のあいづち表現は、「感心」、「思案・納得」、「気づき・驚き」、「肯定」などの意味合いが含まれている感動詞と共起し、さまざま表現意図を表していることを明らかにした。そのうち、「思案・納得」、「気づき・驚き」は「受容」、「同意」のどちらとも共存可能であるが、「感心」は「受容」とのみ、「肯定」は「同意」とのみ共存すると論じている。

また、大浜・山崎・永田（1998）は道聞き談話という場面を設定し、その中で用いられたあいづちとそのあいづちを誘発する発話環境との関係からあいづちの機能を論究した。

実際、あいづちの頻度、形態などは多様な変数

に左右されており、大浜他（1998）のような特定した場面での調査や、藤原（1993）のようなあいづちの重層構造の意味分析、つまり、より掘り下げた調査は必要である。今後、社会的、心理的要素とリンクした研究はさらに重要になっていくと思われる。

これまで見てきた研究は個々のあいづちの形式や機能を主に検討したものであり、個々のあいづち形式の互いの繋がり、つまり、談話におけるあいづちの仕組みに関する研究はまだ希少である。異なるあいづちの形式の関係を論じている研究は今石（1993）、陳（2001）が挙げられる。今石は「はい、ええ、うん」と「あー そうですか」の機能に重点をおいて議論しており、「『理解している信号』としては、聞き手が話し手の情報伝達の意図を確定した場合『あー そうですか』という形式が使われ、不確定の場合は『はい』『ええ』『うん』などの形式が使われる。」（同：99）と述べている。

陳（2001）では今石の考えをふまえた上で、あいづちを発話位置と形式により 5 つのパターン⁷に分類し、それぞれのパターンの機能および発話位置の相互関係を分析した。その結果、聞き手の理解の度合いによるあいづちの使い分けの存在が認められた。

言い換えれば、聞き手が話し手の話を理解するに十分な必要情報のうちの断片を入手した時に発したあいづちを α とし、聞き手がひとまとまりの情報を受け取り、話し手の話の全体を理解したため打ったあいづちを β とするならば、談話におけるあいづちの公式は「 $I1 - \alpha - I2 - \alpha - I3 \cdots In - \beta$ 」としてまとめることができると論じている。

そしてこのあいづちの公式を踏まえ、陳（1999）は台湾語⁸と台湾の北京語特に台湾語に適用できるかどうかを中心に考察を行った。その結果、同様に台湾語のあいづちも日本語と似たような働きを持つことが分かった。つまり、「hē」は（「はい」系）と、「ho」「hō」⁹などは（「その他」系 1）・（「その他」系 2）と同じような働きをしていることが分かった。また、この中では誤用を招きやすい母語の影響などについても触れられている。学習者を対象として、その第 2 言語の発達状況や誤用を研究するに際しては、このような母語との対照研究の必要性が高まって行くのであろう。

4. 非言語行動の研究

言語行動のほか、非言語行動の「うなずき」もあいづちの一種とみなされている。この章では、うなずきを扱った研究を紹介して行きたい。

〈英〉うなずきを含めたあいづち行動の研究には、英語の会話を対象とした Dittmann & Llewellyn（1968）などの研究がある。Dittmann & Llewellyn は、20 人のペア会話実験から、「あいづち」と「うなずき」が出現する場面について分析し、「あいづち」が「うなずき」のみの場合より 3 倍も多く観察されたと述べている。また、「あいづち」と「うなずき」が共起する場合の 70%は、①聞き手が話し手のコメントや質問の間に言葉をさしはさみたいと思うとき、②話し手がフィードバックを求めていると知って聞き手が反応するとき、という 2 つの場合であると述べている。また、時には聞き手が連続的にうなずくことがあるが、それは話し手が話すことを期待し、聞き手がその話題に特に関心を示しているときであると論じている。

〈日〉日本語の会話については、「うなずき」を含む非言語行動の資料観察が困難なことから研究はあまり行われていない。そのうち、杉戸（1989）の研究では分析の結果、「あいづち的な発話」の 70%～80%は「身振りのあいづち」である「うなずき」と共起し、その傾向は個人間であまり差がないと述べられている。また、無言でなされる身振りだけのあいづちは個人間で大きな差異を示し、さらに言語によるあいづち率と身振りのあいづち率は、個人ごとに比例する様子を示すと指摘している。

宮崎（2001）はうなずきが対話においてあいづちと共起することが多く、その割合は被験者のうなずきの合計の 51%を示していると述べている。また、PPU（Pause-bounded Phrasal Unit）と終助詞で出現したあいづちとうなずきの頻度を計算した結果、PPU で起こったあいづちがうなずきより多く、終助詞「ね」では近い割合が打たれていることを報告した。さらに、あいづちとうなずきの回数では差が見られたものの、全体の総数については被験者の間にほとんど差が見られないという興味深い結果を得た。

〈対照研究〉外国語との対照研究では、メイナード（1993）、楊（1997）などが挙げられる。

〈日・英〉メイナード（1993）は、日本語と米英語の会話を対象に、話し手や聞き手の「頭の動

き」である縦ふりや横ふりを 10 のカテゴリーに分け、観察を行った。結果として「頭の動き」の機能は日米で類似しているが、頻度には著しい差が見られたと述べられており、日本人が会話の中で頻繁にあいづちをうつということが分かった。そして、両言語とも聞き手の「うなずき」があいづち行動として頻繁に使われており、米英語会話では「頭の動き」のみがあいづちとして使われる率が日本語より高いということを指摘している。これは窪田(2000)が英語を母語とする学習者の「うなずき」について観察したところ、初級の方が上級者より「相づち詞」の代わりに「頭の動き」のみであいづちを示す傾向があるという結果の裏付けになる。

〈日・中〉楊(1997)は中国人同士の母語会話(CC)、日本人同士の母語会話(JJ)及び中国人と日本人の日本語会話(CJ)によるデータを基に考察を行い、うなずきの使用頻度について $CJ > CC > JJ$ という結果を得た。楊はその結果について、中国語会話では非言語行動をより重視することから、外国語コミュニケーションの時にそれがさらに強められた形で持ち込まれていると解釈した。

〈その他の観点〉喜多(1996)は情報の伝達という「本質的に非対称的」な行動と、参加者間によい社会関係を作っていくための「本質的に対称的」という人間関係指向の行動という視点から、日本語会話の「あいづち」と「うなずき」の特徴の説明を試みた。その結果、会話の途中に展開がなく会話が滞る場面において参加者が交互に短い「あいづち」を繰り返すのは交代のリズムを保つためであり、話の途中に連続して、もしくは話し手と同時にうなずくのはテンポをとるためであると解釈した。

これらの研究は、あいづち行動の出現頻度や話者交代の中で果たす役割などに重点を置いている。しかし、あいづち行動を多様化する聞き手の心理変化という、聞き手の心的態度から捉える研究はまだ多くない。水谷(1984)は、聞き手が自分の結論の論理的弱点を指摘されたとき、あいづちの頻度がぐっと下がった事例は1つあったと述べている。さらに、聞き手にとってその話題が承服しがたい内容である場合、あいづちの頻度が低下すると予測したが、その条件に当てはまる会話資料が少なかったため、立証できなかった。しかし、これは言語資料から聞き手の心理状況の推測を行ったものであり、聞き手の心的態度を本人の内省をもとに分析したものではない。

聞き手に対するインタビュー資料に基づいて、心的態度を把握し、それがあいづち行動の出現の有無や頻度におよぼす影響について分析した研究には陳・小熊(2000)が挙げられる。陳・小熊は聞き手の心的態度に着目し、大学の教員会議の談話資料及びフォローアップ・インタビュー資料を用い、分析を試みた。観察の結果は「あいづち」¹⁰と「うなずき」の頻度が高い場面とは、新たな話題の導入に賛成し話の進行を促したり、提示された意見や情報に賛成の立場をとっている場合、および話題が聞き手自身の職務と関係性が高い場合である。

従来「あいづち」と「うなずき」はそれぞれ一つの言語行為として扱われ、分析されてきたが、人間の言語行動を解明するにあたっては、総括的な面、つまり、言語行動、非言語行動を含めた研究がより望ましい。よりスムーズなコミュニケーションを行うために、日本人の「あいづち」だけではなく、「うなずき」の打ち方や特徴を正しく日本語学習者に伝えなければならないと思われる。今日、「あいづち」の機能については徐々に明らかになりつつあるが、「うなずき」についてはまだ不明の点が多々あり、今後は「うなずき」の研究に注力していく必要があると思われる。さらに、「あいづち」と「うなずき」を別個に扱うのではなく、その相互関係も究明する必要がある。つまり、「うなずき」は「あいづち」行動として扱われているが、言語化されているかどうかという点で、会話の進行の中で、どのような役割を果たしているのか、また、「あいづち」もしくは「うなずき」しか使われていない場合と両者が共起する場合の相違など課題は多い。

5. 今後の展望

これまで紹介してきた研究は、扱うデータの面から大きく電話会話による言語資料と非言語行動を含んだ録音録画資料の2つに分けられる。電話会話は対面と異なって、相手が自分の話を聞いているかどうかを確かめる手がかりは音声しかない。そのため、常にあいづちを打ち、あるいはあいづちを求めなければならない。電話会話はその性質上、音声以外の要因、例えば視線、身振り手振りなどを排除できることから、より多くのあいづちを期待できるため、あいづち研究の重要な手法となり得る。一方、人間のコミュニケーションを研究していく上で、言語的あいづちだけではなく、うなずきといった非言

語行動も考慮しなければならない。そこで、対面のデータも重要になってくる。電話会話と対面のデータは厳密的に言えば同列に比べられるものではなく、研究目的に合わせて選ばなければならない。

ここまであいづち行動の研究を概観してきたが、今後の課題としては5つまとめることができる。

①あいづちの質的な研究

- a) 多様な形式間の繋がり及び重層的な意味の解明
- b) ターンの始まりの部分の意味分析及び役割の解明
- c) あいづちと待遇性、人間関係、話題、話し手の話速、談話の流れによる時間的変化、場面、性別、年齢、地域性などの要因の相関性

②日本語と外国語の対照研究：学習者言語の解明

③学習者の習得

④非言語行動

⑤あいづち行動の指導法

この5つの課題を踏まえた上で、とりわけ以下の3つの方向性を提示したい。

まず、質的な研究の必要性である。例えば、多くの研究においてあいづちの頻度の分析は行われても、①のc)の要因は考慮されない場合が多い。3.2で述べたように外国語との対照研究の結果から、日本語のあいづちの頻度は高いということが分かっており、これに対応する形で、日本語教育においては、学習者に多くあいづちを打つよう指導する声もあった(3.3.2 参照)。異なるあいづち文化を持つ学習者に対して正しい日本語のあいづちを指導する方法論の確立は切実な課題であるが、日本人に対してむやみにあいづちを打つという印象を与えるのであれば、かえって学習者の過剰な反応を引き起こしかねない。あいづちがあまりにも多用されると否定的な評価を招くという裏付けとして、近藤(2001)の報告が挙げられる。つまり、日本人があいづちを頻繁に打つところとそうでないところを明示的に学習者に示さなければならない。陳・小熊(2000)によるあいづちはむやみに打つのではなく、その頻度は心的態度の変動により変わるものだという質的調査はまさにその裏づけになる。また、頻度のほかに①で取り上げたその他の問題としてあいづちの形式間の関係や重層的な意味構造の解明などもさらに深めて行く必

要があると思われる。

次に、①～③の各研究領域を連携させた研究の必要性である。今までの研究、つまり単一の言語を対象としたあいづち研究や外国語との対照研究、学習者を対象とした習得に関する研究などは個々に行われており、それらの間での連携はまだあまり見られない。即ち、それらの研究を総合的に捉えた研究はまだ進んでいないということである。あいづち行動を解明するにも、あるいは日本語教育の現場に応用するにも、総合的な視点を取り入れた研究成果の方が望ましい。総合的な分析を通して、言うまでもなくあいづちの全体像はより明確化される。また日本語教育の視点からも、総合的な分析は、日本語と学習者言語の特徴を明らかにし、より効果的な指導方法の確立を促すに違いない。例えば、陳(1999)で述べられているように、学習者言語と日本語の共通部分を指導に応用できれば、より効果的な成果を得られよう。既存研究では、日本語の考察結果に基づいて、学習者言語と対照し、その結果を習得に応用するものは多くないが、今後はこのような各領域を跨ぐ研究が必要になると思われる。

最後に、非言語行動研究の必要性である。前述したように、人間のコミュニケーション行動をテーマとするのであれば、あいづちの機能をもつうなぎなどの非言語行動も視野に入れなければならない。また、日本語教育の立場においても、言語面の指導に止まらず、対面のコミュニケーションにおける非言語行動の指導にも注力しなければならない。今までは言語的あいづちを中心に議論がなされてきたが、非言語行動の要素を取り入れた総合的な研究の重要性は今後増してくるに違いない。

このように質的な研究、各領域を連携させた研究、非言語行動の研究という3つの方向を今後のあいづち研究の展望としていきたい。

謝辞

この論文の作成に当たり、貴重な御意見、御指摘を下された先生方、日本人の母語話者、支えてくださった方々に心より感謝を申し上げます。

注

1. 宮地(1959: 85)は、(甲)「この本はどうも…」
(乙)「程度が低いね」というやりとりを例に取り、
(乙)の先行発話である(甲)を「前詞」と呼んでい

- る。
- 提示された例から、感想の注目は実質的な発話例のみで、あいづち的な発話は見られなかった。また自己注目表示とは、「自分で自分の発話に相づちを打つ」(1993: 70) というもので、他の研究ではあいづちとして扱われていないものであった。
 - 筆者記。
 - 小宮 (1986: 48) はあいづちの表現類型を「感声的表現」と「概念的表現」の2つに分けた。「感声的表現」とは「ハイ」「エー」「ン」など指す概念を持たず、それ自体で直接に話し手の感情を表す表現。「概念的表現」とは「ナルホド」「ホント」のような概念を表す言語形式と定義している。
 - 5つのパターンとは、(「はい」系)、(「そう」系)、(その他系1)、(その他系2)、(その他系3)である。(「はい」系)、は「はい」、「ええ」、「うん」などの語形を含み、(「そう」系)は「そう」という形式が入っている系列である。(その他系1)は驚き、反問などの感情を表す表現で、(その他系2)は上記の3つの系列の複合表現である。(その他系3)は話し手の話を先取る表現である。
 - 台湾語は福建省の南の方言である閩南語を源とした台湾の方言である。
 - 窪田 (2000: 99) は「相づち詞」の形態を丁寧な表現とそうでない表現を分けた。「ハイ、エエ、～デス、～マスの使用など」を「丁寧相づち詞」とし、それ以外の表現を「普通相づち詞」とした。
 - 「そう」系のあいづちとは「そう」という形式を含むあいづち表現である。例えば、「そうですか」「そうですね」「そうだ・そうです」などである。
 - 陳 (1999) の一部を修正したものである。「hē」を「hē」に、「hə」は「hō」に修正した。
 - 陳・小熊 (2000) は「うなずき」と区別するために、言語化されたあいづち形式を「発話のあいづち」と呼んでいる。

参考文献

- 池上楨造 (1952) 「『はい』と『いいえ』」『国語国文』217, 55-58.
- 伊藤博子 (1993) 「談話の指導—バックチャンネルからの展開—」『日本語学』Vol.12, No.8, 78-91.
- 今石幸子 (1992) 「談話における聞き手の行動—あいづちのタイミングについて—」『日本語教育学会創立 30 周年・法人設立 15 周年記念大会予稿集』147-151.
- 今石幸子 (1993) 「聞き手の行動—あいづちの規定条件—」『阪大日本語研究』5, 95-109.
- 大浜るい子・山崎深雪・永田良太 (1998) 「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』96 号, 73-84.
- 岡崎敏雄 (1987) 「談話の指導—初～中級を中心—」『日本語教育』62 号, 165-178.
- 奥津敬一郎 (1988) 「『はい』と『いいえ』の機能」文部省科学研究費補助金 特別推進研究 (1) 133-184.
- 奥津敬一郎 (1989) 「応答詞『はい』と『いいえ』の機能」『日本語学』Vol.8, No.8, 4-14.
- 喜多壮太郎 (1996) 「あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』Vol.15, 1 月号, 58-66.
- 金秀芝 (1994) 「日・韓両言語における「あいづち」の対照研究—電話の会話を中心に—」『平成 8 年度日本語教育学会春季大会予稿集』85-90.
- 窪田彩子 (2000) 「日本語学習者の相づちの習得—日本人との初対面における会話資料を基に—」『南山日本語教育』第 7 号, 76-114.
- 黒崎良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150, 122-109.
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第 3 号, 大東文化大学語学教育研究所 43-62.
- 近藤彩 (2001) 「商談におけるインターアクション—参加者全員の視点から—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』24, 35-60.
- 佐藤美重子 (1989) 「技術研修員のための日本語研修 30 時間コースへの非言語伝達導入の試み」『日本語教育』67 号, 87-98.
- ザトラウスキー・ボリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 重光由加 (1985) 「会話の進行時における肯定の応答表現機能」『日本女子大学紀要 文学部』36, 17-28.
- 杉戸清樹 (1989) 「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現—」『日本語教育』67 号, 48-59.
- 杉藤美代子 (1987) 「ポーズとイントネーション」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析—』三省堂 107-138.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版 257-279.
- 谷口すみ子 (1989) 「会話教育のシラバス作りに向けて—会話の技術のリスト試案—」『日本語教育』68 号, 259-266.
- 陳姿蓉 (1999) 「あいづちについての一考察—閩南語と北京語の場合—」第 28 回第 2 言語習得研究会発表資料, お茶の水女子大学 7 月 3 日
- 陳姿蓉 (2001) 「日本語の談話におけるあいづちの類型とその仕組み」『日本語教育』108 号, 24-33.
- 陳姿蓉・小熊利江 (2000) 「話題に対する聞き手の心的態度が『発話のあいづち』と『うなずき』の出現に及ぼす影響」『人間文化論叢』第 3 巻, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 237-248.
- 登里民子 (1993) 「相づち習得の縦断的研究」(未刊) お茶の水女子大学修士論文
- 畠弘浩 (1982) 「コミュニケーションのための日本語教育」『言語』12 月臨時増刊号, 56-71.
- 畠弘浩 (1988) 「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』Vol.7, No.3, 100-117.

- 日向茂男 (1979) 「談話における『はい』と『ええ』の機能」『国語研究所研究報告集』第2集, 215-229.
- 藤原真理 (1993) 「対話における相づち表現の考察『そうですか』『そうですね』等を中心に」『東北大学文学部日本語学科論集』第3号, 71-82.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号, 13-26.
- 堀口純子 (1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71号, 16-32.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』Vol.7, No.13, 59-66.
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語学編』三省堂 261-279.
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』Vol.7, No.13, 4-11.
- 宮崎幸江 (2001) 「身振りのあいづちとしての聞き手のうなずき」『2001 年度日本語教育学会春季大会予稿集』176-181.
- 宮地敦子 (1959) 「うけこたへ」『国語学』39, 85-98.
- 村田晶子 (2000) 「学習者のあいづちの機能分析—『聞いている』という信号, 感情・態度の表示, そして turn-taking に至るまで—」『世界の日本語教育』10, 241-260.
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1, 63-88.
- 劉建華 (1987) 「電話でのアイズチ頻度の中日比較」『言語』Vol.16, No.1, 93-97.
- 渡辺恵美子 (1994) 「日本語学習者のあいづちの分析—電話での会話において使用された言語的あいづち—」『日本語教育』82号, 110-122.
- 山本恵美子 (1992) 「日本語学習者のあいづち使用実態の分析—頻度および種類—」『言語文化と日本語教育』4号, 22-34.
- 楊晶 (1997) 「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態、頻度、タイミングを中心に—」『言語文化と日本語教育 平田悦朗先生退官記念号』13号, 117-128.
- 楊晶 (1999) 「中・日両言語の相づちに関する一考察—頻度とその周辺—」『人間文化研究年報』第23号, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 28-38.
- 楊晶 (2000) 「相づちに関する意識の中日比較—アンケート調査の結果より—」『人間文化論叢』第3巻, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 87-100.
- 楊晶 (2001) 「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて—機能に着目した日本人との比較—」『日本語教育』111号, 46-55.
- Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R. & Tao, H. (1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin, *Journal of Pragmatics* 26, 355-387.
- Dittmann, A. T. & Llewellyn, L. G. (1968) Relationship between vocalizations and head nods as listener responses, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.9, No.1, 79-84.
- LoCastro, V. (1987) Aizuchi: A Japanese conversational routine, In Larry E. Smith (Ed.), *Discourse across cultures: strategies in world Englishes*, New York: Prentice Hall, 100-113.
- Maynard, S. K. (1986) On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation, *Linguistics*, 24, 1079-1108.
- Maynard, S. K. (1987) Interactional functions of a nonverbal sign, Head movement in Japanese dyadic casual conversation, *Journal of Pragmatics*, 11, 589-606.
- Maynard, S. K. (1990) Conversation management in contrast: Listener response in Japanese and American English, *Journal of Pragmatics*, 14, 397-412.
- Miller, L. (1987) Verbal listening behavior in conversations between Japanese and Americans, Paper presented at the international Pragmatics Association Conference held in Antwerp, Belgium, 111-130.
- Mukai, C. (1999) The use of Back-channels by Advanced learners of Japanese: Its qualitative and quantitative aspects, 『世界の日本語教育』9, 197-219.
- White, S. (1989) Backchannels across cultures: A study of Americans and Japanese. *Language in Society*, 18, 59-76.
- Yngve, V. H. (1970) On getting a word in edgewise, In *Papers from the sixth regional meeting Chicago Linguistic Society*, April 16-18, Chicago Linguistic Society, Chicago, Illinois, 567-578.

ちん しせい／お茶の水女子大学大学院国際日本学専攻
tzuching.c@gmail.com

Existing research of Japanese backchannels : An overview for the future

CHEN Tzuching

Abstract

This paper reviews research of Japanese backchannels, and attempts to set directions for conducting future research. In recent years, features of the Japanese language became better understood due to insight attained from the increased popularity of discourse analysis and research on difficulties in the learning process of various languages. Specifically, research has indicated that the frequency and number of backchannels is higher in Japanese language communications than in other foreign languages. However, the study of backchannels is not new; it's been studied since the 1950s by Japanese linguistics.

This paper surveys the research of Japanese linguistics, followed by an introduction of the research by discourse analysis. Regarding the latter, after introduction of the researchers' discussed definition the frequency, usage timing, and functions of backchannels, this paper reviews the research of Japanese backchannels from the perspectives of research contrasted against other foreign languages, Japanese language teaching, and non-verbal communications. Furthermore, by analyzing the various fields of the studies and the problems which remain unsolved, three directions for future research development: qualitative research, research connected with another fields, and non-verbal research are proposed.

【Keywords】 backchannels, head nods, non-verbal, communications, Japanese language teaching

(Department of Comprehensive Japanese Studies, Graduate School, Ochanomizu University)